

書評

崔 吉城著

『韓国民俗への招待』

大山 孝正\*

韓国のシャーマニズム研究で多くの業績を持つ著者は、1993年以降、日本の大学で教鞭をとるかたわら、従来のシャーマニズム研究の枠を超えて、文化人類学・民俗学的観点からの韓国文化論・日韓比較文化論を展開している。最近では『恨の人類学』（真鍋祐子訳、1994年、平河出版社）において、死者儀礼などの様々な事例から、「恨」というキーワードによって韓国人の心性を掘り起こすことを試みている。

本書はすでに雑誌や共著等に掲載されたものや、一部著者の書きためていた文章に加筆してまとめたもので、表題が示すように、韓国民俗に関心をよせ、また学ぼうとする読者に向けた「手がかりの一書」（p. 279）としての意義が込められている。しかし、本書の内容は、オーソドックスな入門書とは異なる大変ユニークなもので、一部を除いてほとんど90年代以降の新しい論考であるという点でも、多様な展開を見せる最近の著者の研究動向を知る上で、興味深い一冊である。

第一部 韓国民俗への招待

- 一 韓国のタテ社会とヨコ社会
- 二 韓国の村祭り
- 三 東海岸の別神祭
- 四 東アジアの暦：その葛藤と調和

第二部 韓国民俗のトポスとロゴス

- 一 波市考
- 二 韓国の喫茶店「茶房」の文化人類学
- 三 韓国現代社会における「売春」
- 四 韓国民間信仰における「不浄」の意味

第三部 食文化のアイデンティティ

\*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

- 一 韓国の稲作文化における「餅」
  - 二 韓国社会における飲酒の意味
  - 三 焼肉と在日韓国人
- 第四部 日韓関係と人類学
- 一 反日感情の文化人類学
  - 二 韓国における日本文化研究の動向
  - 三 韓国における日本文化の受容と葛藤

ここでは、本書のすべての内容に触れることはできないが、韓国の文化人類学・民俗学に対する著者の現状認識を汲み取りながら、いくつかの特徴的な部分について触れるにとどめたい。

本書に貫かれる著者の研究姿勢は「あとがき」において端的に示される。すなわち、著者は二十数年に及ぶ日韓の比較研究において、日本の植民地支配とナショナリズムという二つの壁にぶつかったとし、「客観性を信条とする私にとってもこれらを超えることは難しかったと述べる（p. 281）。しかし、「韓国人である筆者が客観的すぎるほど冷静な観点で自文化を紹介することが大事である」とする姿勢は、本書にも反映されており、そうした現状認識にもとづく著者の一連の試みは、「韓国民俗の相対化の試み」と評することもできよう。

韓国人研究者である著者が自文化である「韓国文化」について論ずることが、日本人研究者が「日本文化」について論ずること以上に、困難な問題を伴うのは事実であろう。例えば、第一部の「韓国の村祭り」の中では、セマウル運動の時代に迷信打破の対象とされた「長柱」（村の入り口に立つ村の守り神の神像）や伝統的な部落祭が、最近はその文化的価値が見直され復興し始めていることに触れている。著者はそうした「韓国民俗」復興の動きの背後に、近年の韓国社会における民族主義的風潮の強まりを見ており、それと歩調を合わせた韓国の民俗研究の興隆に対して、一定の距離を置こうとしている。しかし、その一方で「韓

国の民俗学がその民族主義から抜け出ことは当分の間は難しい」(p. 40)とも述べる。これは著者のいつわらざる心情であろうが、著者自身の中では「韓国民俗」の相対化という課題意識が具体的な方向性をもち、さらに少しずつ実践されつつあることが本書の内容からは見て取れる。

例えば、第一部に収められる論考の内、「東アジアの暦」では韓国・日本・台湾の公休日の設定のし方を比較し、それを陰暦と陽暦の重なりの中で再検討することで、近代以降の東アジアが直面した暦の変動に対する国家レベルでの関わり方に、三国間で大きな差異の見られることを指摘している。この論考は大変短いものだが、このテーマに取り組もうとした著者の問題意識は、「民俗」を「民族文化」の範疇でのみとらえることへのアンチテーゼであり、文化変容を国家や政策との歴史的関連の中でとらえていくことの必要性を示唆するものである。とくに、東アジア諸地域における民俗学的研究において暦の問題は避けて通ることのできない重要な問題であるが、農事暦を中心とした従来の民俗学的な「暦」観には、そうした暦の変動のプロセスに対する視点が必ずしも十分に発揮されてきたとは言いがたい。それはまた、単に暦の問題にとどまらず、「民俗」を自明のものとすることなく、いかに歴史的に相対化しえるかという「民俗学的視点」にも関わる重要な問題を含んでいる。

第二部で扱われる「波市」(船上市)や「茶房」(茶房)「売春」などのテーマは、いずれも韓国国内では研究蓄積が少なく、新たな研究分野を開拓することへの著者の意気込みが感じられる。著者自身による調査事例とその分析からは、韓国における民俗文化の形成・変容の過程を、儒教倫理などの伝統的価値観・社会通念との関わり、および韓国社会の近代化・西洋化の葛藤の中で位置づけようとする姿勢がうかがえる。そのために、各事例においては調査対

象者のライフヒストリーにとくに重点が置かれており、その社会経済的な背後関係についても詳細な言及がなされている。こうした手法は、『韓国のシャーマニズム』(弘文堂、1984年)をはじめとする著者の一連のシャーマニズム研究においても発揮されてきたものである。

第三部の各論考は、「餅」「飲酒」「焼肉」などの食文化に象徴的に表わされる意味を考察することで、「韓国文化」について論じようとしたものである。こうしたさまざまな象徴的事物に焦点を置いた文化論は、とかくその宗教的・呪術的意味についての議論に偏向しがちであるが、ここで著者の展開する議論は、日常的あるいは儀礼的な飲食物・飲食行為に見られる象徴的意味を、より社会的次元でとらえようとする点に独自性が見られる。例えば、「韓国社会における飲酒の意味」では、日常の人間関係や儀礼における飲酒および酔うことの肯定的な意味について述べる一方、済州道における「禁酒村」の例を通して、飲酒行為がある社会において否定的な認識がなされていく過程についても論じている。

「焼肉と在日韓国人」は、一般に日本人が韓国の食文化の代表例として考える焼肉を、在日韓国人が日本社会における経済的・社会的・文化的な位置づけの中で生み出し、発展させてきた「韓国文化の象徴」として理解しようとして試みている。著者自身の言葉を借りて言うならば、韓国人の「パーソナリティを売る」、あるいは「文化を味わってもらおう」(p. 189)という文化的象徴的意味合いが、在日韓国人における職業としての「焼肉」には込められているという。ここで韓国の農村社会における牛をめぐる文化的伝統との関連性について著者が展開する議論は、やや表面的・一般論的きらいがあるものの、少なくとも在日社会におけるアイデンティティの問題との関わりで、「韓国民俗」あるいは「韓国文化」をとらえる著者の視点は、他の様々なテーマに

も応用しえるものであろう。

そうした「韓国文化」「韓国民俗」を日本との歴史的関わりの中でとらえようとする著者の視点が、もっとも顕著に表わされているのが第四部の各論考であらう。この内、「反日感情の文化人類学」は、先に編著として出版された『日本植民地と文化変容—韓国・巨文島—』（1994年、御茶の水書房）の一部をまとめたもので、韓国南部の小島をフィールドとしたミクロな視点からの日韓関係史として注目される。「韓国における日本文化の受容と葛藤」も、植民地時代の日本との接触による文化変容について真正面から論じようとした画期的な論考である。韓国では現在でもこの問題を論じること自体をタブーとする意識が根強い中で、著者はごく簡潔ではあるが、韓国の言語・宗教・芸術・制度などに無意識的に残存する、日本植民地時代の影響を浮き彫りにしようとする。著者の指向する「韓国民俗」の相対化は、こうした緻密な作業なくして達成されえないものである。

一方、「韓国における日本文化研究の動向」の中では、近代以降の不幸な日韓関係史が、韓国における日本研究のあり方に大きな影響を与えてきたことを指摘している。著者は、尹正錫氏が『韓国における日本研究』（国際交流基金、1989年）の中で、「地域研究としての日本研究は、いまだその地歩を固められずにいる」、また「韓国における日本研究は、その目的が学問的であろうと実務的なものであろうと、今後はより総合的であらねばならない」と指摘しているのを踏まえながら、「韓国の民俗学が主にナショナリズムによる研究」であると述べ、「民族主義から抜け出て、普遍的な学問となっていくべき」（p. 248）と主張する。これまでに見てきたように、本書もそうした著者の提言の具体的な実践の場となっているのだが、その「当面の研究手法」を著者自身は3つに整理している。すなわち、「長い文化交流の歴史を通しての類似性、親密性を前提

にして比較研究をする」方法、「植民地時代の研究を通して植民主義から脱皮する」方法、「関係史や植民地とは関係なく、一つの異国、異文化の研究としてみる」方法である（p. 245）。

いわゆる日韓関係史において日本が韓国とまったく同等な立場にあったとは言えないが、「日韓」という地域的枠組みの中で「民俗」や「文化」を相対化するという点では、日本における韓国研究のあり方についての議論も、上記のような韓国側の議論と当然重なりあはずである。言うなれば、「民俗」「文化」の研究という枠組みの中で、日韓共通の議論の場が設けられる必要がある。ただし、そこには「民俗」や「文化」という言葉で括られるすべての事象、言語や行為などの解釈、あるいは記述の方法をめぐるさまざまな認識のズレが生じてくるのも当然である。ここで著者が具体的に展開している「方法」についての提言は、方法論というよりある種の学問論であって、そうした日韓共通の議論の場における個別具体的な問題について必然的に起こり得る認識のズレに、果たしてどこまで対処していけるのか、といったことについての説得力を欠いているように思われる。

しかし、ここで著者の指向する「地域研究としての日本文化研究」というベクトルが、韓国における従来の日本文化研究・日韓比較文化論の限界を超える重要な糸口になっていくことは間違いない。その点で、著者の現状認識が必ずしも悲観的でないのは、現実にもそうしたコンセプトによる若手研究者の業績が出始めているからで、そうした蓄積がなされてこそ、先に述べたような日韓共通の議論の場が存在する意義が増してくる。逆にいえば、そうした蓄積なくして、いたずらに日韓の「共通性」を具体化させようと急ぐことは、さまざまな誤解や偏見から脱却し切れないままの、厳密さを欠いた安易な「日韓比較文化論」を生み出すことにつながりかねない。

本書は極めて幅広い問題を扱いながらも、個々のテーマに向かう著者の研究姿勢は一貫した課題意識に裏付けられており、今後の日韓間での文化人類学・民俗学的研究にとって大きな示唆となるものであろう。ただ、本書の趣旨が現実に生かされていくためには、個々の分野におけるより豊かかつ詳細な研究の蓄積が、今後多くの研究者の手で生み出されなければならない。その意味で、最近になって従来の日本研究のあり方を見直そうとする動きが、韓国人研究者の間から出始めていることは、日韓間の学术交流にとって大きな前進であると言えよう。

(B6版302頁 風響社 1996)

### 瀬川昌久著

#### 『客家—華南漢族の エスニシティとその境界—』

志賀 市子<sup>※</sup>

中国の人口の約93%を占めるのは漢族であるが、一口に漢族と言ってもその文化的内実は著しく多様である。そのため自己意識も多様に分化しており、「広東人」「上海人」「福建人」など、漢族のサブ・カテゴリー（民系）ともいべきものが形成されている。本書の主題ともなっている「客家」は、「広東人」「福建人」などと同様、中国東南部を中心に分布する漢族のサブ・カテゴリーの1つであるが、とりわけ強烈な自己意識と連帯性を持っていることで知られている。

本書を読み終えた後、何の気無しにインターネットでHakkaを検索してみたところ、いきなり810サイトという結果が出てきたのには少々めんくらった。評者がのぞいてみたのは、そのうちの「故郷を離れた客家のページ」とか「在米台湾客家協会ホームページ」など2、3のサイトに過ぎないが、そこから「客家グ

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

ローバルネットワーク」や「ワールドワイドリンク集」など、客家を自認する中国系アメリカ人の個人ホームページやサンフランシスコの客家レストラン、マレーシアの客家ユニオンなど、世界各地の客家関連のリソースにアクセスできるようになっている。ある個人のホームページには、「客家とは」というタイトルで、「…客家は漢民族の一族で、もともとは戦乱や迫害史によって中国の大陸の北から南下してきた民族の子孫であり、先住民の排斥を受け、外敵の戦いを通してリーダーシップ、団結精神が産み出された。金融界に強く、強力な財閥グループを作り、華南経済圏を支えているのも客家である…」うんぬんとあった。こうした典型的な「客家アイデンティティ」は、今やコンピュータネットワーク上にまで飛び交っているのである。

本書では、羅香林の業績に代表されるこれまでの客家研究は、こうした客家の強烈な自己意識の上に立脚していたため、客家の特殊性が強調され、さらには中原の正統漢族の継承者として自己正当化しようとする偏向性が見られたと指摘する。本書は、客家特殊論に傾きがちであったそうした巨視的な客家研究を超えて、客家を含む中国華南地域のエスニシティの動態性を、個々の地域社会の社会的、経済的、文化的状況を把握した上で、微視的な視点から再考することを目指した挑戦的な論著である。著者の瀬川昌久氏は、これまで主に香港新界地区をフィールドとして、中国の宗族に関する研究を次々と発表している。本書も著者のホームグラウンドともいべき新界地区でのフィールドワークを出発点としながらも、その後著者が行った広東省での調査の成果と歴史資料からのデータが豊富に取り入れられ、地域的にもまた歴史的スパンから見ても非常に視野の広い論考となっている。

なお本書に関しては既に、横山廣子氏による、本書の扱う領域に関する最新の研究動向を踏まえた書評が発表されている<sup>(1)</sup>。一方評